

平成二十四年三月一日発行（毎月一回一日発行） 巻数八六六号

# 火星

平成二十四年三月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

身ほとりに薄氷のあり昼餉どき

懐手梅の万蕾くぐりくる

紅梅の影する昼拭きにけり

僧止まり懐さぐる雪間かな

寒食や身ほとりのもの日当つて  
浮鴨を近くに雛かざりけり  
大原女の手甲に蝶の生まれけり  
そつけなく野蒜摘みたる指かな  
へだたりて二人となりし夕干潟  
ごつごつと船板ぬらし栄螺網

# 太白星

柳生千枝子

鴨の空仰ぎをり残されてをり  
色失せし枯紫陽花の日々透けて  
ポストへの道冬の鶺鴒歌ひをり  
晦日そば拭き残したる窓一つ  
マンションに灯らぬ一窓銀杏散る  
鬼太鼓の激しさ冬の灯を昏み  
冬鷗ガラスのヨット走り去る

杉浦典子

枯蓮を巡りたれにも遭はざりし  
冬うららら弁慶の鐘打ち損じ

首洗ひ池の冬日のさざなみす  
口笛にクリスマスツリーできあがる  
臘梅のつぼみに日差し師の忌来る  
鱸酒や対岸の灯の荒れてきし  
冬晴の動物園に空の檻

浜口高子

枯芝の起伏を霧の滑りゆく  
湯豆腐や雉の剥製煤けをり  
湯気連れてゆく引売りの枯野人  
極月の切り揃へある布の彩  
真みどりの銀杏ひとりの降誕祭  
森に入り木の実踏みたるクリスマス  
焼芋を半ぶんこして地雨かな

# 火星作品

## 山尾玉藻選

木枯や池の底より鳥たちぬ  
大和郡山城 孝子

白鳥のねむる頃なり水飲み

毛皮着て吊革に手の届かざり

鯉揚げや大和三山きつね色

鮫鱈の吊りあるうしろ脚通る

鳥に鳥寄りくる枇杷の咲きにけり  
宝塚蘭定かず子

落葉焚はじめは空をにござせて

突き崩す燠うつくしや十二月

忘年会ブーツいづれも折れてぬ

星空を来し外套を受けとりぬ

神の火へ筆投げ入れし裘  
八幡坂口夫佐子

僧正の頬ゆたかなり枯芭蕉

シクラメンより生まれり弘法市

大 仏 の 空 へ 響 き し 餅 の 音  
平 家 星 霜 の 匂 の お り て き し  
雪 折 れ の 竹 の 上 の 天 ぬ け ゐ た り  
蝶 の 羽 ゆ る り と 開 く 室 の 花  
魚 つ か む 愛 宕 風 の 池 の 底  
嵯 峨 野 の 泥 吐 か せ し 日 数 寒 の 鯉  
凍 裂 の 木 の 音 聞 こ ゆ 泥 湯 か な  
大 楠 の 上 の 雲 迅 し 札 納  
ア ス フ ァ ル ト を 湯 気 わ た り く る 年 の 暮  
外 泊 の 母 ぬ る 一 夜 飾 り か な  
男 山 の 端 に 三 日 月 年 つ ま る  
羽 子 板 市 客 を 見 て ぬ る 正 座 な る  
口 汚 す 諸 粥 好 き を 吾 が 継 ぎ し  
四 日 は や 紋 甲 烏 賊 の 胴 叩 き  
雪 も よ ふ 雑 木 林 に 楢 積 め ば  
す が 漏 り や 頭 お ほ き な 力 士 像  
鶏 の ま ぶ た 下 よ り 閉 づ る 寒 の 雨

宝 塚 山 本 耀 子

八 幡 大 山 文 子

宝 塚 河 崎 尚 子

# 選のあとに

山尾 玉藻

が、市に足を踏み入れた作者の眼にまず飛び込んだのは、花屋が地に並べた沢山のシクラメンであった。作者は弘法市らしからぬその華やかさを意外に感じ、注目したのであろう。

魚つかむ愛宕嵐の池の底 河崎尚子

木枯や池の底より鳥たちぬ 城 孝子  
木枯が吹きすさぶ中、浚われた池の底から何鳥かが飛び立ったのだ。池底から発った羽音の裂帛が中空の虎落笛を裂いたインパクトある一瞬である。読み手に限りない凍ててを体感させる一句である。

落葉焚はじめは空をにござせて 蘭定かず子

落葉に火をつけようとしても最初はなかなかうまく燃えず、煙ばかりが立って難儀する。作者はその様子を眺めながらふと視線を空に転じた。「はじめは空をにござせて」とは巧みな表現。

シクラメンより始まり弘法市 坂口夫佐子

弘法市では骨董品、古着、木工品、陶器など数多くの露店が並び、古色めいた雑多な雰囲気の特徴の市である。ところ

京都嵯峨野の広沢池の池浚いであろう。水が抜かれた後のぬかるみで、ゴム手袋が鯉や鮒を掴む様子はいかにも寒々しい。折から「愛宕嵐」が容赦なく吹きすさび、池底での作業はいかにも厳しそうである。下五「池の底」の名詞止めがその底冷え感を強調する。

羽子板市客を見てゐる正座なる 大山文字

浅草浅草寺の羽子板市詠。羽子板市の出店にはきちんと板敷が設けられ、そこに坐った店主が呼び込みの声を張り上げている。掲句、上客らしき人物が羽子板を熱心に選んでいるのであろう。店主は板敷にきちんと正座しながら、その客に声をかけるタイミングをはかっている様子である。正座がちよっとした緊張感を象徴している。作者は現場主義の作家、流石に興味深い小景を見逃さなかった。(以下略)



# 恒星圈

同人 I

奥田順子

往生のはなし途切れし虎落笛  
筆箱のどんぐりかろし冬至来る  
大雪の針目大きく走らせり  
十二月何か燃しゐる夫の背  
唐門へ湖のまぶしきクリスマス

伊勢きみこ

長田曄子

女貞の実と教へてもらふ冬の園  
短日やむかし揚屋の陶つるべ  
二上山ふたかみのくつきりとある冬至かな  
数へ日や朝から河豚の一夜干  
大年や吐く息しろきこと嬉し

山茶花や厚きてのひらよみ返る  
冬うらら耳さどくなる齒科麻酔  
犬すねて尻向けてゐる冬うらら  
犬の鼻かすめ枯葉のうら返る  
屋台あり甘酒茶屋あり初詣

大山文子

垣岡暎子

時雨見てゐる大学の鹿カレー  
木枯や灰皿のある楽屋口  
病む人にクリスマスカクタス赫し  
極月の海渡り来しデイベッグ  
赤ペンで退院とある古曆

そここの煙つながら暮の秋  
三輪山やつるべ落しの大鳥居  
水底に宴あるらしかいつぶり  
はやばやと鷺宿る樹々クリスマス  
日覆のきしみて出で来霜日和

# 獅子座

山尾玉藻推薦

西村節子

昼過ぎて綿虫ふゆる潮見台  
数へ日の供花に埋もるる野の仏  
神杉の酒と卵へ雪散りく  
調律師来てゐる家や春の雪

藤田素子

枯蓮になほも枯れゆく時のあり  
綿虫に眼のかゆみ移されし  
女学生の列へ尻割り込みぬ  
風花や犬の訃報の届きたる

田中文治

大佛の町を冬日のおほひけり  
灰皿に煙草のくゆる日短か  
寒木瓜に後ろ手の僧佇ちぬたり  
それきりの鶏の長鳴き雪催

笠置早苗

冬椿をさなき丈に灯りたる  
足踏みの子等一斉に木枯へ  
天つ日を見じんば櫻枯葉降る  
山茶花を散らして翔てり鳥のこゑ

井上淳子

千枚のふぐ鱈干せる馬関晴  
鱈酒や平家びいきの下関  
影踏みの声の消えたる冬満月  
大佛の胎内ぬくし十二月

福本郁子

寒鯉をすくひ入れたる紙袋  
綿虫や本堂の戸の半開き  
黒壁の川に沿ひゆく寒さかな  
狐火やローカル線の一輛車

緒方佳子

大根を煮てよろこびを抑へをり  
駅前演説一人雪きざす  
幕間の大阪鮎や年の内  
十二月浅黄の幕の振り落し